

花炎樹の島

——「炎の花」に魅せられて——

サイパンは花炎樹の島である。

最近は景気の動向も今ひとつはっきりしないので、恒例の家族旅行は、近場のサイパンに決めた。サイパンというと俗化した印象が強く、あまり期待していなかったが、島での休暇は予想外にすばらしかった。

8月は島中が緑でむせかえる。そのあふれる緑の中に花炎樹の真紅の花が燃え上がる。丘にも道路沿いにもホテルの庭にも、いたるところ真紅の花炎樹が、大きな枝を空に広げて咲き誇る。その燃える様は、まさにトロピカルの風情そのもの。

花炎樹は大きいものは10数メートルほどの高さの灌木で、葉はネムの木に似ている。もともとはマダガスカルの原産である。春から夏にかけて花が咲く。

学名をROYAL POINCIANA、英語ではFLAME TREEという。FLAMEは「炎」や「情熱」の意味だから、まさにFLAME TREEの言葉がぴったり。

和名では「南洋桜」または「ホウオウボク」が正式名らしい。ツアーガイドはFLAME TREEを花炎樹と訳していたが、俗名なのか手元の植物図鑑をみてもはっきりしない。

花炎樹という素敵な名前に魅せられて、その語源を探ろうと思っているのだが、ついそのままになってしまっている。

——ラッキー！1泊20万円のスイート・ルーム——

成田を早朝出発し、午後早く、ハイヤット・リージェンシーに着くと、ホテルの日本人マネージャーがにこやかに出迎えた。

コネクティング・ルーム2部屋のご予約でしたが、当方の手違いでご用意できませんでした。その代わり当ホテル最高の1泊2000ドルのスイート・ルームを同じ料金でご用意致しました。よろしいでしょうか。

いいも悪いもない。「1泊20万円の部屋」を誰が断れるだろうか。今度の旅行は出だしからツイている。

7階のその部屋は、40坪の広さで、応接間、ベッドルーム、キッチンに仕切られ、バルコニーから北も西も海を望むことができる。部屋の壁には鏡がふんだんに使われているので、広い

部屋を一層広く見せている。

テレビ2台、大冷蔵庫、トイレ2つ、ステレオにはリチャード・クレーダーマンの「四季」のCDまで備わっている。部屋中には観葉植物が溢れ、ミクロネシア伝統の仮面や古代の刀が飾られている。

サイパンには気乗りのしなかった娘と息子は、打ってかわって「超ラッキー！」といいながら、部屋を走り回り、テレビのマンガに興じ、大きなベッドに乗って寝心地を試している。

何より素晴らしいのは6畳ほどのジャグジー付きの円形風呂。窓を通して海を眺望し、落日の中のマニヤガハ島を楽しむことができる。マイクロ・ビーチの沖合いに浮かぶこの島は、かつて日本軍の要塞があったため、軍艦島と呼ばれている。この静かな海にもまだ旧日本軍の潜水艦や水上偵察機が沈み、熱帯魚の棲家になっている。

——犬かき 4000 年の歴史！——

一休みしたあと、わたしたちは早速ホテルのプライベート・ビーチに出た。見渡す限りの地平は、海と空の間もわからないほど青一色。沖合いにはアメリカ軍の資材運搬船だろうか、4隻の貨物船が停泊し、わずかに海と天の間を分けている。

珊瑚礁が砕けてできたさらさらした白砂の海辺に、真夏の太陽がカンカンと照りつける。夏の入道雲が勢いよく湧き上がる。白波が遠くに碎け散るのが見える。ウィークデーとあってほとんど人影もない。

真夏の太陽は天頂にあがり、じりじりと砂浜を焼きつくす。たまらず海に入りゆっくり泳いでいると、時折海草が手に触れる。海底には20~30センチもある、大きな黒いフランクフルトのような棘皮動物があちこちに沈んでいる。はじめは刺されでもしたらと気味が悪かったが、良くみるとどうもナマコらしい。砂泥の微生物を食べるので、ナマコのいる海はきれいである。

小魚を追いかけたり、海草を集めたり、素潜りして、塩辛い海水をたっぷり飲んでしまった。息子が、突然、「犬かき4000年の歴史！」などとわめきながら、犬かきを始める。息子に意味を尋ねても「何となく頭に浮んだだけ」との答。全くヨシ坊の頭の構造がどうなっているのか、余人には計り難い。

やがて2時間ほどして潮が引き、ビーチ・パラソルの中でひと休み。心地よい疲れが全身を襲う。火照った肌に塩分を含んだ潮風が吹き抜ける。喉の乾きに耐えかねてスナック・スタンドで飲物のリストを見ると、メロン・ドラマティックとフォー・シーズンズという洒落た名のジュースがあり、早速皆で注文する。

メロン・ドラマティックはフレッシュミルクをベースにメロンと氷シェイクを加えたもの。フォー・シーズンズはその名のとおり、グアバ、オレンジ、バナナ、パイナップルのミックス・ジュースである。火照った体に流し込むと、氷が喉ごしに心地良い。

——炎のサイパン——

翌朝は起き抜けにヨーコとヨシ坊とのテニス。その後プールでちょっと泳いで水中展望船のツアー。午後は海で泳ぎ、夜はホテルでのポリネシアン・ダンスのショーを楽しむ。その他にもフィッシング、ダイビング、ゴルフ、ヘリコプター遊覧、熱帯植物園、クルーザー観光、ジェットスキーと盛りだくさんのオプショナル・ツアーが用意されている。こうしてサイパンでの5日間、わたしたちはリゾート地で心ゆくまで放心の時を過ごした。

だが、わずか50年前（注：1944年）、サイパンは米軍の空襲を受け炎と化した。4万余の日本軍は米軍の攻撃を受けて壊滅し、1万人の在留邦人、400人の原住民が亡くなったという。ガラパン市街は米軍の徹底的な空襲を受け、逃げ延びた日本人も「バンザイ」を叫びながらつぎつぎと崖から投身自殺をした。そのバンザイ・クリフを訪れて往時を忍びたいと思ったが、遊びに惚けて訪れる機会がなかった。

戦争は遠い過去の一コマにすぎないようだが、この一見平和に見えるサイパンにも、狂気の爪痕は、夏草の茂る崖に、ジャングルに、そしてコバルト・ブルーの海に残っている。わたしたちは、この人生もこの世界も確固としたもののように思っているが、実はガラス細工のようにもろいものかもしれない……。

——時の流れの中で——

最後の夜、わたしたちはアクア・リゾートでサンセットビーチ・バーベキューを楽しんだ。海辺からわずか数メートルの所でのシーフード・バーベキュー。数組の観光客以外には誰もいない。ラグーンを紅く染めて夕日が沈むと、なめし皮のような海面に、最後の落日が照り返し辺りは一面に黄金色に照り輝く。

やがて夜の帳がおり、松明に火が赤々と灯される。ミクロネシアの海で取れた大伊勢エビ、カニのツメ、ニュージーランド産のムール貝、ホタテのベーコン巻がつぎつぎに運ばれてくる。コックが生きた伊勢エビをヨシ坊に料理するよう身ぶりで示すと、ヨシ坊はさすがに一瞬その大きさに怯む。その様子がおかしいのがまた皆の笑いを誘う。

珍しかったのはマシュマロの串焼き。白いマシュマロを串に3～4個刺して、火で焙ったものだが、結構オツな味である。「ホタテの刺身」がでたので醤油をかけて味わったが、味が淡泊である。「おかしい」と思って聞いてみると、若い椰子の実だとう。

そういえばロンドンで暮らしたとき、フォートナム・メイソン（百貨店）でHEARTS OF PALMの缶詰を見て物珍しくて買ったことがあった。アスパラガスを少し脂っぽくした味だったが、さくさくした風味が好きで、良く食べたものだった。だが、缶詰の椰子の実は、この本場の「椰子の刺身」には到底かなわない。

夜8時近く、突然海辺ではシャワーが降り始めた。空を見上げると、だが、満月が煌々として輝き、シュロの葉の間から白い光が洩れてくる。満月の輝く中、驟雨が降るという何か幻想的な雰囲気が漂っていた。

This is the life……。時のくびきから解き放たれた安穏の一時を心ゆくまで楽しもう。ヨーコはいつのまにか妻より背が高くなってしまった。ヨシ坊も大変な反抗期で妻は毎日手をやいている。ヨーコは13才、ヨシ坊は10才、本当に時の流れは早い。家族旅行を楽しめるのももう数年もあるまい。